

山桜の里 戸赤



川への階段

改良延長 172m
道路幅 7m
井戸沢橋 L=10.3m

やまざくら学校付近の県道が広くなり、地権者の境界立ち合いが終わり用地買収の段階になっていきます。工事がいつから始まるのかはまだ示されていません。工事の内容は、新しい道路が現在の川あたりまで緩やかなカーブとなり、川は田んぼ側へ今の川幅を保ち移動し、杉林はなくなり、川への階段は右岸側に下流に向けて作られます。

【木の学習No.38】木地師文書と移住 「木地師の生涯、即ち移住史である」と言い得るほど、木地師を特徴づけるものとして移住を抜きにして考えるわけにはいかない。その体系や規模について、もっと研究する必要があるのではないかと。両根元地の氏子狩帳については、多くの研究家に活用されてきたものであり、移住史の面でも大きな指針となるものである。それと同時に、通称木地師文書と称するものの中で、特に「宗旨請印證」「往來手形」、寄進金の「覚(領収書)」等に注目する必要がある。これらの文書は一般には受取人の名前と発行年月日が記されている。従って文書を丹念に収集分析することによって、どこの小屋に在住の時、氏子狩を受けたものであるかが判明し、個人の移住を明らかにすることができる。宮城県岩出山町在住の小椋(こむく)氏の持ち伝えた文書に、「安永四年三月、宗旨手形之事」「寛政七年十一月、宗門手形之事」「文政十年六月、寄進金覚え」がある。安永、寛政の頃は信州にいたと思われるが、蛭谷氏子駈帳と対比すると、文政十年には鳴子中山村(現・宮城県鳴子町中山)に移住していることがわかる。鳴子、鬼首方面に展開していた仲間たちは天保の飢饉で散りじりになり、永い移住の果て、秋田県川連へ落ち着いた者、岩出山に辿り着いた者、各方面へ分散していった。江戸時代の文化年間(1804~1817)頃信州から欧州へやってきて、それぞれの地へ落ちてくまでの壮大な移住の規模を知る手掛かりとなる。そういった観点からすると、木地師文書、特に宗旨請印證は重要なものとなるだろう。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より)〈つづく〉



花豆・コーヒセツで お客様の声をきく



この号は3回のうち
2回目(次号に続く)

※お客さまが望むトッピングがあればお聞かせ下さい。

(例：季節のフルーツ、地元ならではのもの、〇〇な味のソース等)

- ・下郷特産のフルーツジュレをお願いします。
- ・夏はソフトクリーム (ピンク等) リンゴはうさぎ形
- ・ジャム、ソース、豆類
- ・甘いので少しお漬け物等あった方がいいのかな？
- ・味が強い分、コーヒーの味も強くすべきだと思います。

(4) また食べたいと感じるセット内容でしたか？

□また食べたい (満足) (49名) □普通 (30名)
□食べたくない (不満) (0名)

※上記理由をお聞かせ下さい

- ・美味しかったです。
- ・食後に丁度良い感じ
- ・普段トイレ休憩だが、このセットでワンコインなら寄っていく。
- ・今度は紅茶で食べてみたい。
- ・パイ生地の食感がよくない。
- ・パリパリ感が好ましい。
- ・コーヒー以外の物がよい。
- ・甘さが丁度良い
- ・コーヒーを少し熱くしてください。
- ・花豆パイそのものも美味しいので単純にコーヒーセットで良いと思います
- ・以前メニューにあった天ぷらまんじゅう+コーヒーセットはよかったと思う。
- ・値段が高い
- ・マドラーはスプーンにした方が良いでしょう。フォークとのバランスで
- ・少しボリュームアップしてはどうか
- ・日本茶又は抹茶セットの方があうのでは？
- ・コーヒーの場合クッキーの方があうのでは？
- ・パイとコーヒーの良い組合せであったから
- ・パイ (生地) にもうひと工夫した方がよい

お客様アンケート 結果
(下郷花豆パイティーセット)

このアンケート調査は、道の駅しもづら(株)おくや・南会津農林事務所・会津農林事務所4者の共同で、平成二十五年三月に行われました



区長ら4人ボランティア2時間

学校雪囲い

窓に板をはめ、屋内の水抜き。広場の整理も。

〈25・12・1〉



区の共同作業

光通信間近か

光ケーブル線がはられ間もなく通信できる見込み。〈25・12・20 撮影〉



町内どこでも光通信できる

(ストーリー性のある村づくりのために[No.8]・紅梅御前宮 桜木姫 その後、妃の紅梅御前と側室桜木姫は、白河の関より宝坂や蟬(せみ)峠の難所をかけて、ようやく大内にたどり着いたが、一足違いに越後へ西進された後であった。王の後を慕って大内村戸右衛門宅までお着きの姫たちは、幾山河長旅の憂い(うれい)さで、もう心身ともに疲れはてていた。それなのに王にはついに会えず、もう生きるきずなを失ってしまった。橘諸安(たちばなもろやす)公の息女で、かよわな若い高貴な女人の身とて、八月二十六日桜木姫はにわかこの地で病没された。家来が走って越後なる高倉宮に訃報を伝えた。宮は御名代(ごみょうだい)として乙部(おとべ)右衛門差佐をつかわされ、九月二十四日大内着、戸右衛門宅に二、三泊逗留して、桜木姫の塚に桜の木を一本植え、伊北村(いほうむら)竜王院の加持で、桜木霊社をお祀りした。桜木姫の塚は、大内より氷玉峠にかかる道端にほつねんと一基、長旅の途次の悲しい死を、いまははや慰めてくれる人もなく、里人呼んで御側が原という所に建ててある。また、桜木姫の衣裳塚とて、水抜村の上手に残されており哀れを訴えている。「下郷町史-第5巻民俗編(発行・下郷町)」より出典(続く)